

唐音の意義功用及び「華音之名師」岡島冠山について

東洋史論集  
卷之九  
空居元念

中山久四郎

一、唐音の意義及び功用

唐音とは廣義にいへば、唐土の音、即ち支那の漢語字音の義にして、狹義にいへば、「唐音」「宋音」「元音」「明音」「清音」などの場合の如く、大體支那歷朝の時代によつて區別さるゝ所の漢語字音の分類の中、特に唐時代の音の義ともなるものである。

されど、更に又別の意味もある。即ち所謂漢音、吳音の我國に傳はりし後、世々の日支往來によつて、支那語が當時の字音のままに傳はつたのを、宋、元、明、清などの歷代を分たないで、すべて唐音と總稱するものである。

やゝ詳にいへば、宋、元、明の時代に、彼國に留學せし我國の僧侶及び我國に歸化せし彼國の僧侶、又は宋、元、明、清時代の商人等の博多、堺、長崎等に來りし者の傳へた支那語で、支那の字音のまま、或はその轉訛または省略したる音にて稱呼される者であるから、漢語の普通の日本發音にて稱呼される者とは、自ら異なりて、外來語の一種と見なすべきものである。言ひ換ふれば、近

世支那より傳來して、支那音のまゝ、或は之に類似せる音のまゝに用ひられて、外來的原素を保持しつゝ、日本語化したものである。

故に之を研究することは、やがて近世に於ける日本人と支那人との往來交通の影響が如何に字音言語の上にあらはれたかを知ることとなり、或はまた近世支那の文化が如何なる影響を我國に及ぼしたかを字音言語の上より觀察することとなり、又之に伴ふ所の支那の風俗習慣等の傳來を研究すれば、ますます近世支那文化の我國に及ぼしたる勢力影響の多大であつたことをも明にすることが出来るものである。

名は實の實なりといひ、實が主にして名は客たる理なるが、また名によりて實の如何を知り易からしむる場合あり。特に其名が多種多様な時は、其實の内容も亦小ならざることを示すものとして、ある一事物の諸名稱は、其事物の意義、性質を知るについて大に參考となるものである。

之によつて今唐音の名を考ふるに、概していへば、唐音なれども、其別名異稱は多種多様にし、て一定しない。又同一文字の名稱にても、其呼び方の異なるものあり。今之を列挙すると左記の如し。諸名稱の下の註の書名は、その名稱を記載してあるものである。括弧内の假名は諸書に記された諸名稱の呼び方である。

一、唐音(トウイン、トウキン、タウイン)

二、唐音(トウウオン、トウラン、タウオン)

三、唐音(カラコエ) 三音正音、上

四、近唐音 悉曇字記真釋、悉曇隨筆、

五、今の唐音 漢字三音考、悉曇隨筆、漢吳音義、白石先生手簡、倭問案、

六、今唐音 悉曇隨筆、阿字正音辨、

七、五山唐音 唐光顯鏡論卷中、風軒偶記卷二、

八、唐韻 白石先生手簡、阿字正音考、

九、唐韻(カラコト) 遊遊解、

一〇、唐言 詩敏、

一一、唐話 唐話纂要、唐話便用、詩敏、

一二、唐語 唐語便用、補窓茶話、

一三、唐譯 唐譯便覽、

一四、唐の言葉 萬葉問合袋、

一五、唐言葉 狂言拾遺卷二、

一六、唐言語 補窓茶話、

一七、唐の聲 國姓卷合戦、

一八、唐人語 言繼御記(天文廿二年自正月表紙) 至三月

一九、唐人詞 國姓卷合戦、訓譯示家、  
唐音の意義功用及び「華音之名節」岡島冠山トウシテ

- 二〇、唐人口 詩載、國姓翁明朝太平記、
- 二一、唐人グチ 槐記卷六、
- 二二、唐人の俗語 和舉辨上、
- 二三、唐人世話ことば 男重實記、
- 二四、からことば たはれくま巻下、
- 二五、もろこしのことば たはれくま巻下、
- 二六、もろこしからのこゑ たはれくま巻下、
- 二七、もろこしこゑ たはれくま巻下、
- 二八、明音 文緯總論、徳尻五七、釋林魏幣集、
- 二九、清音 文緯總論、海舶來貨圖彙、
- 三〇、清音(トウイン) 海遊世載卷五、聲音對、
- 三一、清朝音 音韻啓蒙、
- 三二、今の清國音 熟語附録例、
- 三三、今清朝所呼之音 三音四聲字貫、
- 三四、明清の音 徳尻七二、
- 三五、明清の國音 徳尻七二、
- 三六、漢音 東雅卷一四、

三七、漢語 但林集二六、栗山文集、山陽詩稿、

三八、漢話 桐窓茶話、

三九、華音 華音唐詩選、但林集、(長崎)先民傳、先哲叢書、

四〇、華音(クハイン) 授業綱卷三、

四一、華音(トウイン) 作文志數、撈海一得、

四二、華韻 萬國問合袋、

四三、華言 岡組秀、

四四、華語 唐語纂要序文、

四五、花香 悉曇半開書、花香詩經、

四六、花香(カラコト) 福養、

四七、花韻 選擇區撰抄三、

四八、夏音 藤亮日抄卷三、

四九、夏語 作文學、

五〇、中華語 但林集卷二五、

五一、中夏俗語 中夏俗語表、

五二、華夏正音 春臺先生文集後稿卷一五、

五三、大國之音 但林集卷二七、

唐音の意義功用及び「華音之名詞」岡島冠山について

五四、西音 詩藏、

五五、西土之音 先哲叢談卷五、

五六、唐山音 四音發微、

五七、唐山話 游寓社常談、

五八、支那音 三音四聲字頁、

五九、支那音(トウイン) 詩藏、

六〇、支那俗語 無著道忠譯師著書名、

六一、俗語 南山俗語考、俗語釋義、

六二、俗話 唐光韻鏡後篇、

六三、官話 唐光韻鏡後篇、

六四、象骨 先哲叢談續編、

六五、彼國音 白石先生手簡、

六六、あちやさんの言葉 (長崎方言)

六七、あちさん口 (長崎方言)

六八、鍵音 雄風七二、關林執帶集、

元來、我日本人及び支那人は、一名稱について幾多の別名、異稱又は略號などを用ふることを好むものであるが、六十八種の別名、異稱は、また多い方である。上記の中、同一文字の名稱にし

て、たゞ其呼び方のみを異にするものあれば、それ等を合して一名稱として計算すると、五十六種となる。亦決して少い方でない。

是等の諸別名中、唐音そのものに對して、特別に輕重尊卑の意味を含めない者もあれど、華音、華言、夏音、夏言、中華語などは、明に唐音を尊重した名稱で、五三、大國之音、五二、華夏正音の如きは、唐音尊重の意が特に著しくあらはれて居る。たゞ最後の韃音は、唐音を以て滿清時代の支那なりとし、而して滿洲は最廣義の韃祖の一部なりとして、清音即ち韃音なりとし、之を卑しめ輕んじたる意味があるやうである。

次に附言すべきは、唐音を學ぶ者の學名のことである。唐音を學ぶ者は、其學を(一)唐音學(過庭紀統<sup>卷二</sup>)、(二)綺陽學(唐語使用序文)、又は綺陽之學(徂徠集、譯文答語)、(三)長崎流(詩文國字讀)、(四)長崎様の學問(詩文國字讀)、(五)華音直讀(徂徠集、竹山國字讀)、(六)華音の讀(倭讀要領<sup>卷中</sup>)など、稱呼して居た。是等の六名等の意義は、架説を要しないことと思ふ。たゞ直讀について一言する。直讀とは所謂廻讀に對する名稱にして、通常日本人の漢文の訓讀は上下に顛倒廻環するが如きものなるに、物徂徠及び物門諸子等は、之をよびて和訓廻環、または順逆廻環の讀法、又は回轉の讀法といひ、甚しきは顛倒の讀と稱し、之に對して唐音を以て僧徒の誦經するが如く、所謂棒讀みに讀み下すことが正當なりと主張鼓吹し、之をよびて順流直下、又は華音直讀といひ、つひに唐音學の一種の別名となりしものである。要するに、是等の六名稱も、亦唐音の性質意義を明にするについて參考すべきものである。

今更に近世日本に於ける唐音の傳播の功用を列擧すると、大體左記のやうである。

- (一) 唐音支那語といふ外國語學それ自身の研究に有功なりし事。唐音によりて外國語研究、練習及び實用の機會を得たることは、大體明治以後の西洋語學學修の爲に間接に有功なりし事。
- (二) 漢文の解釋及び研究に有功なりし事。
- (三) 音韻の解釋及び研究の資料となりて、音韻學の進歩に與りて有功なりし事。
- (四) 我國に於ける漢字音の標準論定の資料となりて有功なりし事。
- (五) 我國語の解釋及び研究にも有功なりし事。
- (六) 佛典梵語の解釋及び研究に有功なりし事。
- (七) 支那文學(詩文、小説、戯曲)の解釋、研究、翻譯、及び作製等に有功なりし事。  
支那小説の翻譯及び翻案は、やがて日本文學の内容を豊富ならしめたる事。
- (八) 支那人の漢字を以て音譯したる外國語の解釋、及び研究に有功となりて、歴史、地理の研究に資益したる事。
- (九) 日支の通商貿易に便宜を加へて有功なりし事。
- (一〇) 日支兩國の外交の爲に便宜を加へて有功なりし事。
- (一一) 本草學、醫藥學、物産學の爲に有功なりし事。特に本草物産の名稱檢定等に有功なりし事。
- (一二) 音律、樂譜の解釋及び研究に有功なりし事。



(三) 黃葉宗傳播の爲に有功なりし事。

(四) 唐音によりて其當時の日支交通關係を知るに與りて有功なりし事。

(五) 唐音語の傳播は、我國語を傳播前よりより多く豊富ならしめたる事。元來言語は社會生活の一反映、文化發展の一表現である。若し國民の社會生活、民族の文化發展が、排外鎖國的となつて固定すれば、言語も固定不動的となりて、殆んど何等の變化増加がないわけである。言語の變化増減特に増加するは、社會進化、民族活動の一大證據である。而して今多數の唐音外來語傳播が近世の我國語の數を増加して之を豊富ならしめたことは、近世日本に、葡萄牙、西班牙、和蘭等の西洋語的外來語の傳來したこと、相並びて、近世日本の進展活動を意味するものである。

(一) 数年前日本語中の唐音語彙を編輯したるに、合計八五三語あり。其内唐音基本語が七三五、唐音副成語(ナンキャン(南京)といふ基本語より、南京米、南京玉、南京菓子など、分れて副成したる類のもの)が一一八もあつて、「言海」採收語の類別表に示された唐音語の數より遙か多し。

## 二、「華音之名師」岡島冠山

近世日支交通史上に於ける唐音語の意義、及び其傳播の功能は、大體上記の如く、而してまた之に關する研究も、既に大體之を總合して一篇の論文を作つたこともあるが、今茲に近世日本の元祿より享保年代にかけての第一或は寧ろ徳川時代の第一の唐音家とも稱すべき岡島冠

山の唐音に關する事を記さん。

冠山の略傳は、先哲叢談後編卷之三等にゆづりて、今茲に省略するが、彼の唐音學と小説稗官の學とに於ける學修と其功勞とにつきては特筆すべきものがある。

長崎人たる冠山は、幼少より唐音に慣れて、柳澤淇園の獨寢(燕石十種第二)には、

岡島援之は、長崎にては、長左衛門といひし者也。華音唐音には奇なる生れ也。服元齋がいふには、和中の華客也なりといひしも尤也。

といはれし程の唐音の天才ありしが上に、同郷の國思靖及び清人王庶常に、或は師事し、或は質問し、或はまた獨學して、益々その唐音の力を加へた。

冠山の唐音の師、國思靖は、國造慶隱のことで、名は照、字は玄貞、慶隱は其號である。長崎の人私諡して思靖先生といつた者であるが、明人蔣眉山に従學し、特に音韻に注意し、律呂調聲、精通せざるはなく、先哲叢談續編卷三によれば、

最善華音。旁暨杭閩之方言土語。悉咸記得。與舶來清客對話。不用通詞。當時以譯聞於長崎者。多皆係于授受者。

とあり、また天產著大潮閣の聲音對第九篇によれば、

愨先生○思靖先生尤物也。其門七百餘人從。終身無其子質矣。

とあるものにして、物徂徠の徂徠集卷八の國思靖遺稿序には、

蓋余自數華音。則稍々聞崎陽有國先生者。其聲籍甚也。中略玩其言。考其德行。何謂之

譯士師耳。下略

とある有徳の一君子人たりし者である。而して冠山が之に師事したことは、上文國思靖遺稿序の中にも、

己又從其門人岡玉成○冠山字玉成遊。則稍々得聞其爲人也。

と記してある。次に冠山の清人王庶常に就いて學んだことは、冠山自著の唐話纂要の白樫仲凱の跋文中に、

且質之於大清秀士王庶常者。而後華和之人。無不伸舌以稱嘆之。とあるによりて之を知ることが出来る。

冠山は大體斯の如き天才と修業とによりて、唐音に精熟して、

其開口譚唐。揮筆譯和。恰如仙人之尸解。將凡骨庸胎。一時脫換。獨餘其衣冠而不化也。一起一坐。一咲一咳。無不肖唐。嘗在綺陽。與諸唐人。相聚譚論。其調戲謔罵。

與彼絲毫不差。旁觀者。惟辨衣服。知其玉成。其技之妙。大率如此。故海内解音者。

聞名警服。望風下拜。〔唐話纂高希希樸即高瀨學山序文一節〕

と稱賛されし程の妙域に達し、後、平安、浪華の二都及び郡山に遊歴し、遂に江戸に至り、至る處唐音精熟を以て稱せられ、從學するもの少くなかつた。

冠山は又首として唐音學を根據とせる稗官小説の學を唱道し、寶永、正徳、享保年代頃の唐音の専攻家たるも、兼修家たることを論せず、又支那文學の稗官小説の學を以て世に鳴る者、殆ん

唐音の意義功用及び「華音之名師」岡島冠山について

三六〇

ど皆或は冠山に師事し、或は之と交遊しない者はなかつた。皆川淇園関の日本諸家人物志卷下の冠山の條に、

華音小説の學、行はるゝこと、専ら此人よりはじまる。

といひ、先哲叢談後篇卷三の冠山路傳の初にも、

首唱稗官學於世。先是雖有從事之者。未甚精之。及冠山起。始能詳明於其說云。

といへるは、ともに簡單なる言なれども、よく冠山の斯學首唱の實功をのべたものである。

さて此冠山に或は師事し、或は彼を先輩として仰ぎ、或は彼と交遊したる諸名家を列舉すると、左記のやうである。

一代の鴻儒、物徠が冠山を延いて以て唐音の譯師とした事は、特に注意すべきことにして〔徠徠卷十八、譯社約〕木下蘭阜、朝岡春睡は、冠山に師事從學し、岡白駒、晁世美、朝枝世美、陶冕、陶山冕、篠崎東海、松宮觀山等は、冠山を先輩又は先師として仰ぎ、細井廣澤も冠山につきて唐音を質問し、高瀬學山、白樫仲凱、原武聊の諸子は、紀州方面に於ける交遊もしくは後學として、盧草拙、釋大潮の二子は長崎方面に於ける知友として、皆共に唐音を研究し、稗官小説の學を修め、唐音、稗官學界に於ける冠山の地位は、譬へば北辰の其所に居て、而して衆星の之に共ふが如しといふも、溢美過褒の言ではない。

(二) 譯社約の一節を録すれば次の如し。

茲與井君伯明。及舍弟叔達。結社爲會。延崎人同生爲師。(中略)凡會之課。其要在以夏變夷也。

以上は大體享保以前に於ける冠山の唐音學修及び其世評並に唐音學上の地位に關する記事なるが、享保年代の中葉に於ける諸學者の彼に對する贊辭を記すと次の如きものがある。

○崎陽學。一華音足矣。學興。冠山子唐話纂要出。而學者好之。不啻玄酒梁肉也。後有

唐譯便覽及唐音雅俗語類。學者謂。天實生才。即取道崎陽者。以為標幟矣。(唐語使用

序、享保乙巳十年春三月、釋大綱撰)

○冠山子生乎肥。長乎肥。肥會同之地。故多與閩廣吳會之人交。善操華音。(唐譯便覽序、

享保十一年丙午正月伊藤長胤(東涯)序)

○冠山岡君。自幼嫻于華音。曲分雅俗。博識南北。能兼華人所難兼也。聽其官話鄉談。

則若明州縮來。儘在華人之傍。音形手容。一口便作百千情態。中略君嘗在東武。名家所

重。下略(唐音三體詩序、享保丙午十一年)秋、龍洲岡千里撰)

「能く華人の兼ね難き所を兼ねたり。」といへば、即ち唐音語の本土たる支那人以上であ

いふに同じ。冠山の唐音精通の世評實に偉なるものである。

次に冠山の唐音關係の著述もしくは序文又は參閱等の書類を表記すると、次の通

(一) 唐話纂要 (五卷) 冠山著 享保元年序跋、同年(?)刊 ありである。

(二) 同 同 同三年刊

(三) 和漢通 唐話纂要 (六卷) 同 同

(四) 新增韻鏡易解大全 釋盛典述 同

唐音の重義功用及び「華音之名師」岡島冠山について

唐音の意義功用及び「華音之名師」冠山について

三六二

(五) 太平記演義

冠山著

同四年冠山序

(六) 詩牌譜

細井廣澤解義、重田秩山校正、冠山序并唐音參照

同五年序  
※同十五年刊

(七) 聲音對

天產著 大潮閣

同五年刊

(八) 辛丑元旦詩集

冠山點唐音并序

同六年刊

辛丑元旦は即ち享保六年元旦である。此詩集は辛丑元旦に當り、大學頭林信篤(阿)岡、林信充(復軒)の父子、林門諸子(桂山、彩巖等)、室鳩巢、安積澹泊、篠崎東海、石井雲澗、長崎の人、冠山と共に、上記細井廣澤解義の詩牌譜に施した唐音を參照したる者、其他、合計五十五人の作りし新年の詩を編輯したもので、每首冠山の唐音を詩側に點し、詩集の初に特に「點華音」の三字を記してある。畢竟當時唐音流行の爲にかゝることをしたのである。

(九) 四書唐音辨

冠山序

同七年刊

著者朝岡春睡は羽後の人、冠山の唐音門人である。

(一〇) 華音唐詩適

冠山著

同十年序

(一一) 字海便覽

同

同年刊

此書は朱子語類の中、四書五經の註釋の俗語を説明したもので、

喫也、得。不消喫也得。ト、喫フテモヨシ、喫ハデモヨシト云フコト也。也得ノ二字ハヨシト云フコトニシテ、常話ニ專ラ使フ。長崎ニテ唐話ヲ講スル者ハ、盡ク之ヲ

知ル。然レドモ字面ノ上ニテハ解シカタシ。口傳セズンバアルベカラズ。〔卷一總論  
爲學之方〕

〔内俗  
語〕

といふ説明を見ても、其一端を知り得るが如く、唐音唐話の智識に基いた著述である。

(三) 唐音三體詩 冠山著 同十一年序、同年刊

(三) 唐音雅俗語類 同 同年刊

〔每字注官音并點四聲の體裁により、篠崎東海、松宮觀山同校とあれば、東海、觀山の二子も、冠山に就いて唐音を學びし者であらう。享保十年の釋大潮の序がある。〕

(四) 唐音雅俗語類 同 〔刊行の年不明〕

(五) 韻鏡古義標註 寂龍述 同十一年自序、同年刊

(六) 唐音大學 冠山著 同十二年刊

(七) 唐音中庸 同 同

(八) 和讀要領 太宰春臺著 同十三年自叙、此年冠山歿

(九) 唐語使用一名唐話使用 冠山著 同十一年釋大潮序、同二十年刊

(一〇) 唐音談話問答 同 同

(一一) 通俗忠義水滸傳 同 同

(一二) 通俗元明軍談 同 同

(一三) 通俗明清軍談 同 同

唐音の意義功用及び「華音之名師」岡島冠山について

(論) 小説讀法

同

(三) 尺牘辨解

同

(二) 尺牘便覽

同

(一) 大清

康熙帝遺詔  
新帝登極詔

冠山句讀

〔享保八年刊〕

以上、二十七部、其大多數は直接唐音學習の書である。然らざるも、唐音もしくは唐語の智識を基礎として著述した字典及び小説、尺牘の類か、又は其書中に多少唐音を發見し、或は少くとも之に論及したるものにして、最後の(一)の一書のみ、殆んど全く別種のものゝやうである。けれども、此(一)の一書とても、冠山の唐音唐語學の副産的著述と看做してよろしい。さて上記二十七部の直接もしくは間接に唐音に關係せる諸書を分類統計すれば、次の通りである。

冠山著

二十部

冠山序

四部

冠山點唐音

一部

冠山唐音參閱

一部

冠山句讀

一部

計二十七部

但し「冠山序」の四部といふ中には、「冠山點唐音」の一部と、「冠山唐音參閱」の一部とを重複して算へたものである。

冠山の唐音唐語界に於ける、亦勤めたりといふべきである。

さて冠山の唐音著述に關する當時及び後世の世評如何といふに、上記諸書の序跋等に見ゆ



る冠山推稱嘆美の言によりて、其大體を知り得ることであるが、更に冠山と同時代の人及び後世人の著述にあらはれた冠山唐音著述の世評を輯録すれば、略々左の通りである。

○頃日遇長崎之人。而見陪唐話纂要。止乎實移唐人之語音。而喫茶喫飯之場者爲明了共。

下略〔新撰大和詞 本保五 年刊〕

○唐人の俗語を知んとならば、唐話纂要、唐音雅俗語類、唐譯便覽等見るべし。下略〔和學辨上〕

○岡島授之、長崎ヨリ京大阪へノボリ來リ、江戸へモ赴キテ、共業次第ニヒロマリ、唐話纂要、雅

俗語言ナドイフ類ヒノ書ドモ、多ク梓ニチリバメ、世ニ行ハル。〔授業編 卷三 唐音〕

○顛倒かちなる文作りて、自が氣では、柳子厚、韓退子に、挑灯と草履もたせるくらゐのかうま  
ん、唐話纂要、弁用から引出して、ズエンチャンズエンチャンなど、唐人の聲色遣ふ己が身  
のかた腹いたきをほいと棚へうち上て、おらが叔父もあんまりな文官じや、下略〔歌謡校 併優  
家翁貝氣質式亭三馬著〕

以上、僅に四箇條の紀事なるが、唐話纂要、唐譯便覽、唐音雅俗語類などの冠山著述が、普く且つ  
久しく世に行はれ人に用ひられたことの大體を窺ひ見るべきものである。されば唐話纂要  
の高瀬學山の序文に冠山の唐音精熟の妙を稱賛して、

故海内解音者。聞名響服。望風下拜。〔重出〕

といひ、又朝岡春睡著の四書唐音辭〔享保七年刊〕の冠山序文の中に、

春睡子問華音於予。而屹々年餘。然後漸有所進。中略其書上下卷凡二本。題曰四書唐音

辨。中略因請序於序曰。吾子乃華音之名師。衆皆所共知也。盍爲之誌數言於篇端。以引我不謬之證耶。下略

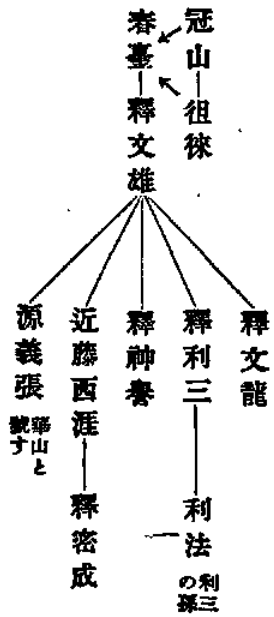
とあるが如き、決して偶然にあらざる也。但し後文は他人の言を引用したものはいひながら、「吾子乃華音之名師」の言を聞いて欣然として自ら賢とし、得意然たるが如き状あるは、聊か謙慎謙遜の美德を缺くの嫌あるを免れないものであらう。けれども、當時唐音俗語、唐語稗官の爲に盡力貢獻することの最も多かつたのは、實に冠山にして、「華音之名師」といふ美稱も、あなごちに溢美の虚名ではないのである。

冠山の唐音の事、殆んど之を記し了つたやうであるが、三宅觀瀾の「送浮屠大潮師序」は、大潮とともに冠山をも贊美したものであるから、左に之を鈔録する。

日者又有以西音○唐書求鳴世者。其於士人。曰岡島生。於納流。則曰大潮。俱肥州之産。毎二人見訪。試其所習而觀之。曼爾則金石遞奏。疾讀則轄轄齊起。晤語吟嘯。劇談嘈噴。如頃如嘖。從入於耳而不通於心。宛然將與蕃外之民相面於一席之上。奇亦甚矣。而二人者。遂乃軒眉抵掌。自詫曰。不通於此。則無以自言也。無以爲文也。〔觀瀾集卷

## 三

冠山の事を記せば、なほ冠山を延いて以てその譯師としたる物徂徠及び物門諸子の唐音の智識及び唐音獎勵の熱心、並に漢文唐音直讀の鼓吹の事は勿論、物門諸子の中にも特に太宰春臺の唐音學としての學殖、及び春臺を主としたる唐音學者の系統は、



といふ類る盛なる状況にあつたことなど、即ち冠山の唐音學の後世への影響としての當時の學風——特に音韻學、韻鏡學——及び世態に論及すべき筈ならんも、それは後日にゆづることとなす。

唐音の意義功用及び「唐音之名稱」岡島冠山について